書評　Vladimir Alexandrov, *To Break Russia's Chains: Boris Savinkov and His Wars Against the Tsar and the Bolsheviks,* New York: Pegasus Books, 2021, xix + 562 pp.

田村 太

1919 年、ボリス・サヴィンコフ（Борис Викторович Савинков, 1879-1925）の長編小説『なかったこと』（1912-13）を抄訳した作家の三上於菟吉（1891-1944）は、作者の経歴を次のようにまとめた。

> 本篇の原作者ボリス・ザヴィンコフ氏は雅号ロオプシンを以つて知らるゝ新露西亜の作家である。ケレンスキイ内閣に陸軍大臣となつて以来その名は愈ゝポピュラァなものとなつた。一九〇六年セルヂ大公暗殺に與かつて死刑宣告を受け、脱獄の冒険に成功して以来欧州は勿論亜米利加三界に流浪して活動俳優にまでなつたと言はれてゐる。大戦勃発の当時は仏蘭西にあつて仏軍に投じて働いているうち、国難に招ばれて故国の人となつたのである。ケレンスキー氏失脚以後の氏の消息は詳しくしない。[1]

むろん、社会主義者＝革命家党（エスエル党）戦闘組織の指導者のひとりにして、小説『蒼ざめた馬』（1909）の作者ロープシン、そして十月革命後は反ボリシェヴィキ運動の闘士に転じた「サヴィンコフ氏」の経歴はあまりにも有名だ。1917 年以降は措くとして、三上の記述も概ね史実どおりだが、ここには「伝説」が混じっている。サヴィンコフが「亜米利加三界」に渡米したり、「活動俳優」になったりした事実はないからだ。しかし、彼ならやりそうだという妙なリアリティはある。実際、彼の生涯はそのような印象をあたえるほどドラマチックで波瀾にみちている。サヴィンコフを題材にした小説、戯曲、映画、TV ドラマは膨大な数にのぼり、今日も「伝説」は私たちを刺激してやまない。

だがその反面、最近まで「サヴィンコフ伝」なるものは存在しなかった。つまり膨大なアルヒーフ史料や研究論文に依拠しつつ、彼の全体像を「伝記」としてまとめる試みは、まことに限定的であった。唯一の例外はロシア史家のリチャード・スペンスが 1991 年に上梓した «*Boris Savinkov: Renegade of the Left*»[2] であったが、それ以来まとまった伝記は最近まで登場しなかった。ソ連期のある作家は「サヴィンコフ伝」など存在しないとすら言った。「彼に関する伝記の一つも、この混色しあい矛盾にみちた運命を収納できず、肖像画は彼の姿を描写できず、すっかり片をつけることもできなかった。そして現在も彼に新しい事実と詳細な特徴が付け加えられているが、問題は解決されぬまま、サヴ

[1] 三上於菟吉「序」、ボリス・サヴインコフ／三上於菟吉訳『露西亜の秘密結社』玄文社、1919 年。引用に際して旧漢字は常用漢字に改めたが、それ以外は原文ママである。
[2] Richard B. Spence, *Boris Savinkov: Renegade of the Left*, New York: East European Monographs, 1991.

ィンコフの謎は増える一方である」。[3]

とはいえ 1990 年代の状況から早や 30 年近く経った。その間にサヴィンコフ研究はさまざまに発展し、史料集 [4] も充実してきた。近年の研究蓄積や新史料に基づく学術的評伝 [5] も 2020 年代からいくつか刊行されている。「伝説」から「伝記」へ――ゆっくりとだがサヴィンコフを取り巻く知的状況は変わりつつあるのだ。

本書 «*To Break Russia's Chains: Boris Savinkov and His Wars Against the Tsar and the Bolsheviks*»（『ロシアの鎖を断ち切るために――ボリス・サヴィンコフ、ツァーリとボリシェヴィキへの彼の戦い』）も、そうした近年の研究成果のひとつであり、スペンス以来およそ 30 年ぶりの英語の「サヴィンコフ伝」である。

著者のウラジーミル・アレクサンドロフ（Vladimir Alexandrov 以下「著者」）は亡命ロシア人 2 世としてニューヨークに育ったロシア文学研究者。プリンストン大学で比較文学の博士号を取得後、イェール大学スラヴ語・スラヴ文学学科教授として長年にわたり教鞭を執り、現在は同大学の名誉教授である。著者はベールイやナボコフといった近代ロシア文学の作家に関する研究書で知られているが、優れた伝記作家としても名高い。ロシアを渡り歩いた黒人興行師の知られざる生涯を扱った «*The Black Russian*» [6] は一般読者にも広く歓迎された。

歴史の彼方に消え去ったかに見えた無名の人物の軌跡を鮮やかに描き出したあと、つぎに著者が挑んだのは、ロシア史において毀誉褒貶の激しい人物のひとりであるサヴィンコフの生涯であった。迷路のようなアルヒーフでの史料収集をとおして人生が変わったという著者にとって、[7]「サヴィンコフ伝」は血が騒ぐプロジェクトであったに違いない。各国（米国、イギリス、イタリア、オランダ、フランス、ロシア）のアルヒーフで収集した史料に加えて、同時代人の回想録、書簡、日記、そして既存のモノグラフや史料集をかき集めることで、著者はキメラのようなサヴィンコフの全体像をまとめ上げている。そのため、本書は出典・註・索引も含めて 560 頁超えの大著であり、その内容を細やかに要約していくのは至難の業だ。それにサヴィンコフの生涯は人口に膾炙しているため、細々とした紹介文よりも本書を読んだ方がはるかに良いだろう。そこでこの書評では内容紹介を最小限に

---

[3] *Шенталинский В.* Свой среди своих: Савинков на Лубянке // Новый Мир. № 7. 1996. С. 173.

[4] См.: Борис Савинков на Лубянке. Документы / Науч. ред. А. Л. Литвин; Сост.: В. К. Виноградов, А. А. Зданович, В. И. Крылови др. М.: РОССПЭН, 2001; «Революционное христовство». Письма Мережковских к Борису Савинкову / Сост.: Е. И. Гончарова. СПб.: Пушкинский дом, 2009; Три брата (То, что было). Сборник документов / Сост.: К. Н. Морозов, А. Ю. Морозова. М.: Новый хронограф, 2019.

[5] См.: *Куренышев А. А.* Жизнь как роман, роман - как жизнь. За что боролся и погиб Б. В. Савинков. Штрихи политического портрета. М.: АИРО-XXI, 2021; *Морозов К. Н.* Борис Савинков. Опыт научной биографии. СПб.: Нестор-История, 2022.

[6] Vladimir Alexandrov, *The Black Russian*, New York: Grove, 2013. 邦訳：ウラジーミル・アレクサンドロフ／竹田円訳『かくしてモスクワの夜はつくられ、ジャズはトルコにもたらされた――二つの帝国を渡り歩いた黒人興行師フレデリックの生涯』白水社、2019 年。

[7] 著者の個人 HP を参照した。［https://www.valexandrov.com/about］ 2023 年 5 月 27 日閲覧。

留め、本書の大まかな構成と性格を確認したうえで、いくつかの論点に沿って本書の成果を吟味したい。

本書は前書きとエピローグのほか全 11 章を通して、彼の生涯を時系列順に再構成している。第 1 章はエスエル党戦闘組織に参加する以前の時期に、第 2 章から第 4 章までは戦闘組織での活動期に、第 5 章から第 6 章までは組織を離脱してフランスに亡命した時期に、第 7 章は二月革命後にロシアに帰国して臨時政府に入閣する時期に、第 8 章から第 9 章まではロシア国内外で反ボリシェヴィキ活動に傾注する時期に、第 10 章はサヴィンコフがボリシェヴィキの作戦によってソ連領内で逮捕されるまでの時期に、そして第 11 章は彼の死までの時期に、それぞれ割り当てられている。

本書の趣旨は、サヴィンコフの 46 年にわたる生涯(ミクロ・レヴェル)を軸としつつ、近代ロシアの辿った歴史と文化(マクロ・レヴェル)を紐解くことで、それぞれの運命と可能性を重層的に物語ることにある。

「前書き」ではサヴィンコフが注目に値する 2 つの理由が述べられている。第一に、サヴィンコフの生涯の「桁外れさ unbelievable」。「彼は間近でテロリストの一団を監督し、自らの行ないの道徳性に懊悩したが、自分自身は決して殺さなかった。彼は狡猾な陰謀家だったが、ロシアの政治的陰謀史上最大の詐欺の犠牲者になった。彼は幾年もツァーリの警察から逃げたが、革命の年の 1917 年間に政府の大臣になった」(xiii)。[8] こうした経歴を前にして、サヴィンコフの信念と彼の実際の選択を理解しようと努めるとき、考えにくかったことを考えざるを得なくなると著者は述べている(xiv)。本書の全篇にわたって incredible や luck といった語が多用されるように、にわかに信じがたい彼の「桁外れな」生涯を物語ることが、著者の狙いである。第二に、ロシアという国の歴史の可能性。著者によれば、サヴィンコフの生涯は、ロシア国家の性格と世界におけるその役割という、今日もなお重要な問題を反映している。もしサヴィンコフの仕掛けた幾多の試みのどれかが成功していたら、ロシアも世界も大いに違っていただろう。サヴィンコフの生涯を語ることは、ロシアの歴史に潜伏していた可能性を照らしだすことである(xiv)。

つぎに本書の魅力として、著者の筆致の巧みさをおおいに強調しておかねばならない。本書は学術的スタイルの研究書でもあり、読み物としての面白さをもったノンフィクションでもある。1922 年春に開かれたジェノヴァ会議で、ボリシェヴィキの代表団を暗殺すべく、自らの「影武者」を用いながら潜入するサヴィンコフの描写など、さながらポリティカル・サスペンス映画を見ているような印象がある。また著者の筆がさらに冴えるのは、歴史的な出来事の起こる建造物や都市や庭園などの具体的な描写である。エスエル党戦闘組織の幹部が集結していたジュネーヴの街、テロルが起こるペテルブルグやモスクワの市街地、サヴィンコフにとって第二の故郷となったパリの街、ケレ

[8] 以下、本書からの出典は丸括弧内に該当する頁番号を示す。[……]は評者による省略表記である。

ンスキーの陰謀が展開する冬宮殿の孔雀石の間やニコライ 2 世の図書室、1920 年代のモスクワ市街……。こうした主人公の行く先々の場所を、豊かなディテールとともに生き生きと描き出すスタイルはすでに «*The Black Russian*» でも見られたものであり、著者の十八番である。背景の豊かで精緻な描写の数々が、サヴィンコフのドラマチックな生涯に効果的な彩りを添えるだけでなく、具体的風景の背後にある文化的諸相をも開いている。

さらに著者は、歴史的事象を生き生きとしたものとして現代の読者に届ける工夫を凝らしている。ワルシャワのギムナジウムからペテルブルグ大学法学部への進学後、サヴィンコフは過熱していた学生騒乱に参加する。その頃、ヴィリニュスでのミハイル・ムラヴィヨフーヴィレーンスキイ(Михаил Николаевич Муравьёв, 1796-1866)の記念碑の設置をめぐって、多くの学生たちが抗議活動を行なっていた。この人物はカトリック教の修道院および教会の閉鎖やポーランド語の禁止など数々のロシア化政策で悪名高く、ワルシャワ育ちのサヴィンコフが反発するのも無理はなかった。著者はこの記念碑をめぐる紛争をアメリカ人読者に分かりよく伝えるために、南軍の将軍であり KKK の初代指導者であったネイサン・ベッドフォード・フォレスト(Nathan Bedford Forrest, 1821-1877)の記念碑のエピソードを「アナロジー」として丸括弧内に補足している(5)。フォレストは悪名高い南軍の将軍であり、2000 年のアラバマ州セルマ市での彼の記念碑設置は多方面にわたる議論をよんだという。

一見すると何でもないように思える補足だが、ロシア史だけに閉じるのではなく、現代の場に積極的に開きながら、サヴィンコフをはじめとする同時代人の怒りを読者に届けようとする著者の姿勢を見ることができる。もはや「革命家」や「革命運動」といった言葉が自明でない以上、かつての人びとの怒りや葛藤を、時代も地域も文化も異なる人びとにどのように現代の場につないでいくか、著者の戦略がうかがい知れると思う。

さて、ここまで本書の大まかな構成と性格を語ってきたが、次にサヴィンコフ研究において重要な論点に沿って、本書の注目すべき成果を具体的に見ていきたい。紙面の制約もあるので、ここでは次の 2 つの点に絞ることにする。第一にサヴィンコフ像、第二に彼の文学作品。

第一に、著者がどのようなサヴィンコフ像を提示しているか、どのようにアプローチしているかを検討したい。近年の研究と同じように、本書もサヴィンコフの「伝説」の扱いに慎重である。著者は彼を単なる「権威への抵抗者」としてみることを避け(261)、既存の伝記で語られてきたサヴィンコフのさまざまな「伝説」を検証するなど(226)、最新の研究傾向にならっている。そのうえで著者のサヴィンコフ像を評者なりにまとめると、彼は生涯にわたって騎士道精神に生きた人間であると言える。彼にとって「忠誠」・「名誉」・「義務」・「約束」の理念は、政治のデモーニッシュな世界をドライブするための北極星であり、サヴィンコフはそうした理念を大切にしたという。

では著者はどのようにしてかかるサヴィンコフ像を効果的に描いているだろうか。少なくともアプローチは 2 つありそうだ。ひとつは「アゼーフ的なもの」であり、いまひとつは「サヴィンコフの表

象」である。

エヴノ・アゼーフ（Евно Фишелевич Азеф, 1869-1918）は、言わずと知れた「大スパイ」である。オフラーナ（内務省警察部警備局）と内通していた「スパイ」（正確を期せば、挑発者＝煽動者 провокатор）であり、エスエル党戦闘組織でテロルの指揮をとった「革命家」でもあった。彼については、大佛次郎の小説『地霊』（1946）や邦訳されたノンフィクション [9] などで日本の読書人にもよく知られているだろう。それでも本書を読めば、この得体の知れない人間の奇怪さや不可思議性にあらためて強い印象を受けるはずである。著者によれば、アゼーフは「怪僧」ラスプーチンに匹敵する「桁外れの人物」（an unbelievable figure）であり、「[……]ロシアを分裂させ、20 世紀を定義づけた未曾有の人災を準備した勢力の徴候であり、代理人であった」（47）。

いかにもアゼーフはサヴィンコフのような騎士道精神の真反対に位置している。彼はけっして金で買われただけの「裏切り者」ではない。エスエル党員に関する情報提供でオフラーナから生活費を得て、革命家たちを幾人も絞首台に送る一方で、テロルを積極的に組織したり、暗黙のうちに承認したりするなど、30 件もの暗殺計画に参加した。こうしたアゼーフの行動の動機は金銭欲や自尊心、あるいはロシア帝国におけるユダヤ人差別への復讐（アゼーフ自身ユダヤ人だった）など、さまざまあり得るが、著者は推論の姿勢を崩さず、今日も謎のままとしている（62）。

サヴィンコフは革命家としてのアゼーフを心から信じ続け、彼がオフラーナのスパイであることを信じようとしなかった。エスエル党の幹部がアゼーフへの尋問を決めたときですら、それがアゼーフの「名誉」のみならず、戦闘組織の「名誉」、さらに自分自身の「名誉」への「侮辱」であると反発した。尋問が始まったとき彼は詳細な記録メモを残したが、そこには「尊厳」、「卑劣」、「侮辱」、「軽蔑」そして「名誉」の言葉が書きつけられている（178）。

つまり著者は、アゼーフというサヴィンコフの陰画をとおして、彼における騎士道精神的な理念を浮かび上がらせている。それと同時に騎士道精神的な理念を重んじるがゆえに、簡単に他者の欲望の道具となるサヴィンコフ像も見えてくる。ナロードニキの女性革命家ヴェーラ・フィグネル（Вера Николаевна Фигнер, 1852-1942）の回想録で示されたように、「エスエル党員は馬鹿正直だ」（С.-р. глупо честны）。著者はこの洞察が、その後のサヴィンコフとエスエル党の運命を理解する上で重要な鍵であると述べている（178）。たしかにサヴィンコフの生涯に「アゼーフ的なもの」は常につきまとった。アゼーフからケレンスキーへ、そしてボリシェヴィキへという風に、サヴィンコフが向きあう対象は変化するが、一貫して彼は騎士道精神的な理念に忠実であり、そのたびに裏切られた。このように著者はサヴィンコフに「アゼーフ的なもの」を突き合わせることで、彼の輪郭を効果的に浮かび上がらせることに成功している。

---

[9] ロマン・グーリ／神崎昇訳『アゼーフ』河出書房新社、1960 年。ボリス・ニコライェフスキー／荒畑寒村訳『アゼーフ――革命のユダ』現代思潮社、1970 年。

次のアプローチとして、著者は視覚的な局面に重点を置いている。つまり写真や同時代人のナラティブによって切り出されたサヴィンコフの表象を読み解き、その相貌から理念を抽出するのである。だから本書ではよくサヴィンコフの顔や服装や身振りが子細に描写される。サヴィンコフの顔はしばしば同時代人にどこかロシア人らしくない印象を与えた。政治家として演説台に登ったときも、ロシアの雄弁家の好む大仰なジェスチャーは避け、「壁に釘を打ち付けるような短く、エネルギッシュなフレーズで」力強く話した(240)。

著者はこうしたサヴィンコフの表象にこだわるが、ポイントはそうした個々の身振りや仕草が、彼をかたちづくった文化の場と密接に関係しあっていることだ。たとえば、著者はワルシャワの文化環境とサヴィンコフとの関係について、当時の上流階級のポーランド人が特有の行動スタイルやマナーを共有していたことに言及している。サヴィンコフ自身の行動様式は、のちに彼の周囲から虚栄心にみちた身振りと非難されるが、じつはこうした社会規範やマナーを反映しているのではないか(10)。このような叙述は、「革命俳優」や「革命のスポーツマン」など、彼個人の異質性や独自性を強調してきた先行研究とおおきく異なっている。その意味で評者にとって眼から鱗だった。

第二に、著者がサヴィンコフの文学作品をどのように扱っているかを見てみたい。著者にとってサヴィンコフの小説や詩は、独自の価値をもった言語芸術としてよりも、彼の葛藤や苦悩を理解する上で重要なドキュメントとしてまず価値がある(199)。だから作家としてのサヴィンコフに対する著者の評価は概して高くない。『蒼ざめた馬』のテーマは非常に独創的だが作者の文学修行の明らかな産物であり(192)、『なかったこと』も一定の創作上の進化が見られるとはいえ同時代の小説と比較すると見劣りし、文体やトーンにも独創性がないと手厳しい(201-202)。

とはいえ著者はこれまで注目されなかったサヴィンコフの初期作品にも目を向けることで、作家サヴィンコフの文学的進化を丁寧に扱っている。これまでの研究において、サヴィンコフの文学作品といえば、もっぱら 1909 年以降に「ロープシン」名義で公表された『蒼ざめた馬』や『漆黒の馬』(1924)が取り上げられる反面、それ以前の創作が顧みられたことは稀であった。その意味で彼の文学的経歴の出発点を、ヴォログダでサヴィンコフが「カーニン」名義で執筆した 1903 年の短編『夜』に見ている著者の姿勢はまことに新しい。さらに『夜』と 1911-1914 年の間に執筆された詩群を突きあわせて、サヴィンコフの描く悪魔の形象の連続性を見てみるなど、意欲的な手並みも光っている。

以上見たように、本書は高い学術性と一般読者を意識した読み物としての性格を兼ね備えており、興味深い洞察や発見も含んでいる。ただし一般読者に配慮した分かりよい叙述が、かえって学術的な「慎重さ」や「厳密さ」の程度を弱めているようにも思えた。第 1 章で著者は、組織論におけるサヴィンコフとレーニンの共鳴に言及し、彼らの生涯においてこうした一致はこの時だけであり、1917 年にペトログラード行きの同じ列車内で彼らが「会った」時も互いに反目していたのだろうと記述している(23)。ただしユーリイ・アンネンコフ(Юрий Павлович Анненков, 1889-1974)の回想によ

れば二人は同じ列車に乗っていたとあるのみであり、実際にその場で対峙したわけではないようだ。[10] また「エスエル党員は馬鹿正直だ」という言葉を著者はフィグネルの発言のように扱っているが、正しくはナロードニキの古参の革命家マーク・ナタンソンの妻ワルワーラ・ナタンソン（Варвара Ивановна Натансон, 1853-1924）の発言である。[11]

しかしこうした微細な点は本書の致命的な瑕疵とは言えない。疫病と戦争というまさに「蒼ざめた馬」が私たちの世界を疾走しているかに見える現代において、かくも抜群に面白く読みごたえのある「サヴィンコフ伝」が新たに登場したことは偶然ではあるまい。サヴィンコフが今日に向けて放つ「桁外れさ」は混迷の時代に鬼火となろう。サヴィンコフや近代ロシア史の研究者だけでなく、歴史や文化に関心を寄せるすべての読書人にも自信をもってお薦めしたい。

（たむら　ふとし）

[10] *Куренышев А. А.* Владимир Ленин и Борис Савинков – два русских политика и революционера. Две судьбы на фоне эпохи // Вестник Московского Государственного Областного Университета. Серия: История и политические науки. 2020. № 2. С. 56.

[11] *Фигнер В. Н.* Воспоминания. В 3 т. Т. 3. СПб.: because АКТ, 2019. С. 302.